

# “World War IV will be fought with sticks and stones.” Albert Einstein

第4次世界大戦は棒と石で行われるだろう。 アルバート・アインシュタイン

～ 3400年前から今日に至るまで、世界で戦争がなく平和だった期間はわずか268年だった。

クリス・ヘッジズ著の【本当の戦争 すべての人が戦争について知っておくべき437の事柄】に書かれたこれを信じるならば、それだけ人は争うということです。3400年前といえば、日本は縄文時代。縄文時代の草創期は10000万年ほど前ですから、旧石器時代とあまり変わらない生活だったと考えられています。縄文時代には戦争がなかったとする説もあれば、戦争があったとする説もあります。なかったとする説のエビデンスのひとつとなっていたものは、縄文時代草創期の出土品。愛媛県上黒岩洞窟から出土された男性の骨の中に、鹿骨の尖頭器が刺さったものが初めて見つかり、事故か争いかはわからぬとしながらも、殺人だろうと判断されました。しかし後に女性の遺骨であり、鹿骨の尖頭器は死後に刺したものであると判明。悪霊払い等の儀式ではなかったのかというところで落ち着きました。更にその後、縄文時代各時期のものとされる出土品の中から、矢尻のようなものが刺さった人骨が見つっています。これも事故か争いか儀式かはわかっていません。いづれにせよ、あまりに出土事例が少数であることから、戦争があったと確証できる材料とはいえ、長年、縄文時代には戦争がなかったという説はもちろん、戦争があった説についても、肯定、否定、どちらも確信できない状況でした。出土される人骨が物語るものは、過酷な環境の中で生きることの厳しさであり、人が必死で命を繋いできたことだけだったのです。

オーストリアのコンラート・ローレンツは『攻撃』という、人類の攻撃的本能を説きました。これを支持するならば、戦争はいつの時代であっても起きるべくして起き、むしろ起こして当たり前ということになります。しかし戦争は本能によるものではないとする山口大、岡山大等の研究グループの論考が、2016年3月30日、英科学誌バイオロジー・レターズ電子版にて発表されました。同研究グループは全国242カ所から収集した狩猟採集時代である縄文時代の人骨2,582体分をデータとして、大人1,044体の内、傷を受けていたのは19体であったことから、暴力による死亡率は1.8%と結論づけました。先ず研究によれば、欧州や米国、アフリカなどの狩猟採集時代の暴力死亡率は10数%。この10数%を根拠に戦争本能説が支持され続けていました。この度の山口大と岡山大などの研究グループの論考によれば、環境や文化、社会形態などの違いによって戦争が起こるか否かが左右されると結論付けています。

私たちは上記を受け、【人は戦う本能がある故、戦争は致し方ないものではない】と信じることにしました。しかし、更に突き詰めれば、人は窮地に立たされた時、自分もしくは自分を含む集団の存続や正当化の手段が実力行使による戦いであると思えば、そのように動くものなのだということも言えるのです。時代によって戦争に求めるものが変わり、準じて戦い方や規模が変化してゆきました。その戦いに求められる武器も開発され、使われるようになりました。

棍棒で戦うリスクは、対峙する敵とフィフティフィフティです。敵との距離も、さほど遠いものではありません。棍棒では、力がある者、体格が良い者が勝ちます。自分のリスクを軽減し、更に遠くの敵を負かすために、槍になったり弓矢になったりしてゆきます。距離を取って攻撃できれば、自分のリスクを軽減できる！もっと確実に本日の獲物を確保できる！力が劣るものでも獲物を確保する可能性が格段にアップする！そのような生きる糧に密着した「願い」が、道具を発展させてゆきました。知恵を持つ者や道具を作り出す者も、パワーがある者と同様に重宝されたことでしょう。道具の発達、パワーが全てではない世の中の構築に貢献しました。道具によって人は生活の中で「役割分担」を得て、お互いを尊重しあうバランスを作ってゆきます。